新収　浮世草子『好色日用食性』

――解題と翻刻――

中嶋　隆

本書は、柳亭種彦『好色本目録』に書名が記載されるが、伝本の確認できなかった稀覯本である。枕絵風な挿画をもつ所謂「好色本」ではあるが、以下の点で、元禄期の江戸・上方書肆間の交渉を考究するのに不可欠な資料である。

（1）最終巻を除く各巻は原装にて保存状態が良く、貞享・元禄初期の「好色本」の典型的形態をもつ。

（2）刊記によれば、主版元は江戸・西村半兵衛であることは明白なのだが、挿画・版下筆跡・紙質等から推察すると、明らかに上方で製作された本である。

まず、書誌を記す。

（書型）半紙本五巻五冊。縦二一・六糎、横一五・八糎。

（表紙）山吹色原表紙。

（題簽）原、四周双辺（四隅に飾り）、縦一六・四糎、横三・〇糎（巻一）。

「恋の分物語 好色日用食性　一（三、五）」

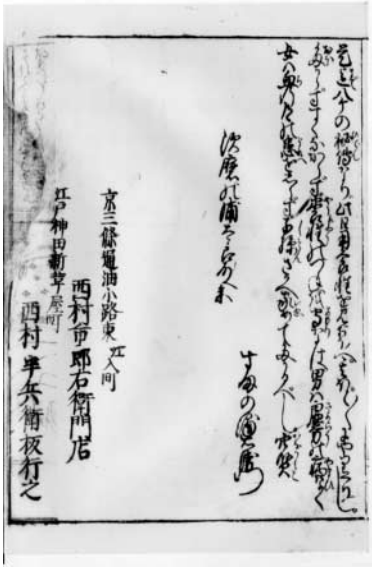
「恋の分物語 好色にち用食性　二（四）」

（内題）「好色日用食性昔物語巻之一（巻二～巻五）」

（目録題）「好色日用食性昔物語目録」

（尾題）「好色日用食性昔物語　巻之一」

「好色日用食性　二（三）」



巻四・五なし。

（匡郭）四周単辺、縦一八・九糎、横一三・九糎（目録）。
四周単辺、縦一八・九糎、横一三・九糎（本文）。

（序・跋）なし。

（丁数）〈巻一〉目録一丁、本文一〇丁。
〈巻二〉本文一一丁。
〈巻三〉本文一一丁（最終丁を後表紙に貼る）。
〈巻四〉本文一一丁（最終丁を後表紙に貼る）。
〈巻五〉本文九丁（第八丁が落丁）。

（挿画）〈巻一〉一オ・三ウ四オ・七オ・九ウ一〇オ。
〈巻二〉二ウ三オ・六オ・九ウ一〇オ。
〈巻三〉二ウ三オ・六オ・九ウ一〇オ。
〈巻四〉二ウ三オ・六ウ・九ウ一〇オ。
〈巻五〉七ウ・（八オ・八ウ）・九オ・九ウ・一〇オ・一〇ウ・一一オ。（第八丁落丁。目録に「八ケの伝授姿枕絵」とあるので、八図が原態。上部に本文が入る）。

（画者）未詳。『好色ひゐなかた』（元禄三年刊）『好色春の明ほの』（元禄六年刊）と同じ絵師。

（柱刻）〈巻一〉「日用一　〈目一」
「日用一　〈丁付（一～十）」
〈巻二〉「日用二　〈丁付（一～十一）」
〈巻三〉「日用三　〈丁付（一～十一）」

〈巻四〉「日用四　〈丁付（一～十一）」
〈巻五〉「日用五　〈丁付（一～二三～七）」
「　　〈丁付（九～十一）」

（蔵書印）なし。

（刊記）京三條通油小路東江入町
西村市郎右衛門店
江戸神田新革屋町
西村半兵衛板行之

（備考）巻五は、内綴じの紙縒りが抜かれているので、第八丁を抜いた上、あとから表紙をかぶせたものと思われる。なお、巻五の綴じ目側上部が粘着していたのを、溶解剥離した。巻五第九丁から第十一丁は柱題を欠くので、後刷・改題本の一部を取り合わせた可能性がある。

本書の奥付には刊年が記されないが、貞享末年から元禄五年以前の刊行と推定される。元禄五年刊『広益書籍目録』には「五　同（好色）日用食性」、元禄九年刊『増益書籍目録大全』には「五／同（西村一良）　同（好色）日用食性（にちようしよくしやう）　二匁五分」との記載がある。版元の西村半兵衛は、天和二年八月刊『増補陰陽新撰八卦抄』の刊行を嚆矢に、元禄九年三月刊『格致余論諺解』まで、出版物の確認できる書肆である。当時の多くの江戸書肆が、京都書肆の江戸店的性格を有したが、西村半兵衛も、京都西村市郎右衛門と強い連携があった。両書肆刊行書の詳細は拙稿「西村市郎右衛門未達の出版活動と没年の推定」（『初期浮世草子の展開』若草書房　一九九六）を参照されたい。

ここでは、西村半兵衛が単独で上梓した書物と、市郎右衛門以外の書肆と連名で刊行した書物をあげておく。

天和2　増補陰陽新撰八卦抄
天和3　和歌雲井の桜　　馬蹄二百句
天和4　花の名残
貞享2　本朝諸社一覧
貞享3　蛙合　好色伊勢物語

新収　浮世草子『好色日用食性』

貞享5　二休咄　　日本永代蔵　　女百人一首　　連歌至要抄
元禄3　花摘　　其袋
元禄4　北条時頼記

このような独自の出版活動と京都西村市郎右衛門との強い提携が、半兵衛を主版元にする本書の出版につながったものと推測される。恐らく、本書は江戸の半兵衛が出資し、京都の市郎右衛門が上方で本を製作して、江戸に下したものだろうが、半兵衛の版株（権）がどのように保証されたものか、不明である。管見では、このような出版・流通形態は他に例がない。元禄九年刊書籍目録に版元を「西村一良（市郎右衛門）」とするのは、同年頃に半兵衛が営業を停止したからと推測されるが、元禄五年刊書籍目録に本書が載るのは、この書籍目録の版元の一人であった市郎右衛門の介在があったからであろう。

江戸・上方間、あるいは京都・大坂間の書肆の具体的な提携形態については、元禄六年以前の資料がなく、未詳と言わざるをえない。本書は、その有力な資料としての意義をもつのだが、その考究は後稿を期したい。

翻刻にあたっては、次の点に留意した。

一、旧字体・異体字等の漢字は、常用字体等通行の文字に改めるのを原則としたが、「瀧」「嶋」「條」「餘」など一部の漢字は原文どおりに翻字した。
一、濁点・句読点は原文のまま施した。
一、丁移りは、末尾に「」（）を付し、丁付と表裏をオ・ウで記した。
一、巻五・七丁裏から十一丁表にかけては、上段の本文を翻刻した。

（なかじま　たかし　教育学部教授）

（外）恋の分物語　好色日用食性　一

好色日用食性昔物語目録

㊀芝折焼てひとり竈　付り　誰が蒔したね嵯峨に　ふた子あり

㊁闇もまよはぬ恋の下道　付り　短契きられたる　髪あり

㊂恋の似せ若衆本来は女　付り　色にそみやすき　墨衣あり

㊃流あひたる恋の湯の山　付り　情を作る後家　ふたりあり

㊄契はかたし石山詣　付り　恋も垣ねも　破たる有

㊅比丘尼袖引雪の黄昏　付り　厚きなさけのこたつ　ぶとん有」（目一オ）

新収　浮世草子『好色日用食性』

㊆縁は可笑愛染の宮　付り　餘おもひの風呂敷　づゝみあり

㊇君か情は蚊屋に社あれ　付り　好色伝授夢中の　箱あり

日用食性夢中の巻

㊈色道秘伝十三ケ條　付り　しらで叶はぬ女道の　口訣あり

㊉八ケの伝授姿枕絵　付り　たれも見てしる仕組の　口訣あり

目録終　」（目一ウ）

好色日用食性昔物語巻之一

㊀芝折焼てひとり竈　付り　誰まきし種嵯峨に二子有

生れ出てより　（挿絵）

好色女

生れながらの

好色男　（挿絵）

恋路にわたるいく瀬川、情の末ぞおかしき○○▲　手」（一オ）

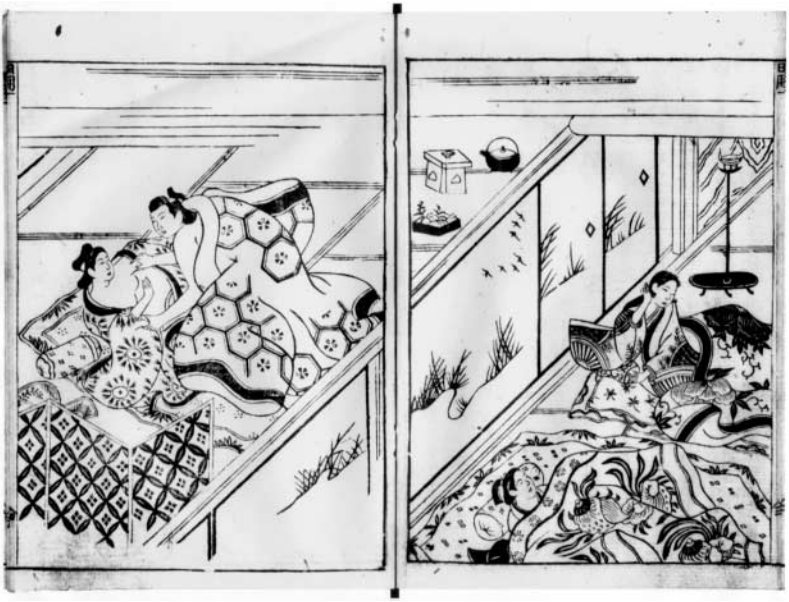
をうちてかんじ。又耳をそばたて聞事も。皆是恋慕愛執の四つにこもれり。されば氷は水より出て水よりさむく。遊女は。地女より出て地女よりわけよしと。さるおやぢの。万年ごよみにおくかきせしも断かな。今はむかしいづれの比にか在けん。すまの浦右門と云男。とし比都の嶋原にかよひてひとりの女郎になじむ。さりぬべきえにしにや。女郎はわけて此おとこかわゆく。おとこも又。ほねまでに思ひしみて。物日〳〵のさゝめ月日かずへてはや来年は年があいて。身がまゝながら。こうした借金が御ざんすほどに。まだ一二年もつとめませうと。涙ながらのむつごと。さてこそふびんいやましに。のこる年と借銭とを。是ほどにしてと。わけをたてゝ。願のかう」（一ウ）べをたるれば。くつわも岩木ならず。望のまゝにゆるして。くるはの住ひを遁。七條のある辺のうらざしきに。妹背の鍋墨を自洗みがき。夜昼なしに一儀を行ひける程に。須磨の浦右がさし来る水。ひかたとなりて三とせも待ず。朝の霜ときへぬ。悲しみの涙には。よるの物も朽なん。ふたりねの枕も。今は長すきていらず。頼べき子さへなき身の。昔は色ざとの春秋に。翠の眉をかざりて。音信を絶ぬれば。親類の行衛もしらず都の内はすまゐまされりと。さがのゝ片辺に。葉柴草垣の庵を結心細も。小川の芹なづなをつむ。爪先の血にあるゝは。古の紅粉に引かへながら。千種の花を折て。都の町にあたひを求め。三十にたらぬ独居の。庭の木の葉を集。明日の薪を嵐にと待も淋しき有」（二オ）さま哉。かくあさま

しき中なれば。其わけの一儀はいかな〳〵思ひ絶たる事ながら。いつとなく月とまりし。御腹の形おかしく。日比のうき事の病と成て。かたまりたるにやと思ひ過るに。日をつみて男女の二子をぞ産たりける。契かたの覚もあらず。かく浅ましき事こそあれ。いかなる渕川へも捨んと思へど。さすが又たま〳〵まうけたる子なれば。父こそしらねいたましくなりてそだてける程に。とし月へて各〳〵十八才にぞ成ける。姉をお蘭。弟浦太郎とよぶ。自然と孕たる程の好色の腹にやどりたれば。兄弟ともにたゞには非ず。目つきに情をふくみて。其わけに賢ければ。下手の長置百もくの損と思ひ。先姉を去方へ娵入させるに。三日共居ずに立帰る。せんかたなくて又あるかたへ有付るに。是も前に替」(二ウ)らず。さすがに捨ても置れず。三度迄えにしをむすへと五日とて送事なし。或は男の弱を恨。又は一物の細をなげき帰りたるにぞ在ける。もとより母も分しりなれば。大形に推量して其後は打捨ぬ。さてはむすこがひとりね物うからんと。近き辺より娵を乞請てかあわす。娵のやうぎさはやかに。人相猶かはゆらしければ。母も嬉敷思ひけるに。此むすこ極たる好色。一物よのつねにすぐれふとく。はり弓のごとく。障子も貫斗也。妻を求て。まみへ来る其夜は。互にうい〳〵敷有べきを。新枕よりしたるくしかけのりかゝる。娵は未十六才。物にはなれず。打ふるひて有を。初昔の御茶の口切いたはりもなく物する。女は餘情なくすゝり泣して逃さらんとするを。いだきとゞめ。さま〳〵のぬれことなといひかけて企けるに」(三オ)

挿絵」(三ウ)

挿絵」(四オ)

手を摺て。さりともこよひはゆるさせ給へといへど。物が猶つのりてかんにんならず今一つと取始。ぬつと根迄とゞかす時。是はならずとのり出。一間の内を持まはりて。漸〳〵其夜はあけぬ。それよりして夜日をわかず行ひける程に。娵のかたたまり兼逃てさとへ帰りにけり。迎をやりても命在てこそとかこち歎に。舅も聞わけて終に



かへさず成ぬ。せんかたなければ。世に娵のなきにもあらしと。此度は態もどり娘の二十餘肥油づきて。数奇らしきを呼むかゆる。其夜より頓てしかけて乗かゝる。娵は久しぶりにてのやりくりおもしろからんと待わびたる所へ。ゑしやくもなくさしこむ。其ふとさ。ふたに成やうなるを摿ほそめてぬつと半入たる気味どふもいへず。かみつきすいつき。ふるひわなゝきてわけもなく取」（四ウ）みだしたるを。つゞけてむしかへし〳〵て夜もしら〳〵と明ぬ。とかく人間のわざならぬ。腎勢夜昼に七つ八つ。かける日もなく物しける程に。是も又たまりかねて。いくほとなく逃帰る。身より出せる嫋乱なれば。姉も弟もやもめと成て。姉はかたち能男。或は鼻の高きを見て。一向に心を動し。弟は又あそこの娘。爰の女にと心をよせてすきまをかぞへ。兄弟ともに徒に日を送りけり。さても母はつく〳〵思ひまはすに。適〳〵ふたりの子を得て。たのもしく悦思ひしに。かく迄色ふかき心の何楽しみかあらん子は三界のくびかせと聞しは誠かな。

此上は愛憐をはなれて。仏の道に。もとづきなんと。うば玉の黒かみを剃。山ふかくのかれ入て恩愛のつなを切。兄弟今はせんかた波のよるべなく。殊には又」（五オ）親子のわかれ。身のゆくゑ。とりまじへたる悲しみの涙。袂の色もかはる迄にと。馴し嵯峨野を立出。姉は五條の橋にかゝれば。弟は又三条のかたにと心ざし。互に名残乞こはれて別〳〵になりにけり

㊁闇もまよはぬ恋の下道　付り　短契きられたる髪有

まよふた〳〵迷故三界十方ともに。好色の道より生じたる人なれは。石の中の玉はうづもれぬとも。みめよき女のすたる事有まじとむかしのわけしりのいひしは。げに去事ぞかし。扨もお蘭のかたは。母に捨られまいらするのみか。弟にも又わかれて。行先しらぬ旅枕。ふしみのさとにしりたる者のあれば。是を頼に尋行て。始おはりの事どもかたりなげけば。」（五ウ）人の心に鬼はなき物。やねやの何がしか情を加てとゞめ置。いかならん奉公の口をもと尋けるに。鱣とわかひ衆とはよひ〳〵ことに穴さがしすると。才六人形がうなづきしもいやといはれず。向隣の人は物かは。あたりの若きおのこ。此おらんを見聞しよりあらかたの見舞どもや。常には音づれもなきやね屋の門に。雪踏の音の絶間もなく。ある時は文。ある時は又さゝやきごとの。引手あまたにつもれど。本より色ふかき心から。よのつねの情には顔をもあげす。わざと打しほれてなを物を思はせぬ。かく日比を経る内に。となりなる人のとりもちにて去やごとなきかたへ目見へに出ぬ。其おもざしのうつくしさ。貴妃の眉ずみをぬすみ。小町小督の俤も是にはと。あや」（六オ）しき迄にかはゆらしければ。さはりもなく。約束きはまりて宮づかへに出ぬ。さればおらんは其生れつきかしこく。ならはずして。かんなのちは文。うつくしく書なし。ひかずして琴を学び。ふきといふも草の名。めうがといふも草の名と。折ふしはおあいてにかきならす顔ばせに。心をかけぬ人はなかりし。それが中に杉川の何かしとかや。おな

じ内に給仕して。あくまで。色道にまめなる美男の。いつよりかおらん事を聞およびて見ぬ恋にあこがれゐる。比は長月十三夜。愛岩嵐に雲はれ翅の鳫の数よむ迄にくまなき空。御慰にとて。おもてのかたに奥かたいらせられ。さま〳〵の御あそび御酒も次第に色めきわたれば。口の間の男ともにも酒のませよと仰あれば。」（六ウ）

挿絵」（七オ）

おらん御使をうけたまはり。さはやかなる小袖ゆりかけながら立出たる。杉川の何かし。日比聞恋に思ひみだれゐけるに。此姿をかい見しより。魂をとばして。有頂天へもゆきあがる心ちやるかたもなき思ひのたね。ゆめようつゝよとほれまさりて。今はわざくれ。よしやいのちと打物にせんとおもひさだめしより。ある日人の情をもとめ。文してかくとしらせける。もとよりおらんも月見の宵。此おとこをしりめにかけ。たゝにはあらぬ心の水の。さそはおちんとおもふ折から。うれしの玉づさやとひらけば。書ながしたる水ぐきのおかしくかはゆらしく。あはれにやさしく。しなすはがりの文章にながめ入ふかくおもひしみてたがひの心はかけひの音の底のおも」（七ウ）ひはかよへど。逢見んことの便もなし。爰に幸の事こそあれ。書院の下をくゞりはいもてゆけば。おらんがひとりふしぬる小部やに出る道ありといひこす。是ぞ逢瀬のかよひぢと約束かたく。小夜更人しづまりて。かの下道を這行ほどに。思ふ庭にぞ出たる。さし覗は障子引たてゝ。内にはともしひかすかなり。もしさわりのこともやと。やをらえんのもとまてよりて。内のていをきくに。女のかたも宵より待わびて荻ふく風もそれやはと耳をそばだてゝありければ。さし足の音をきゝて。障子をひらき。人かげを見つけうれしく。たちいて男の袖をひかへ。ねやのもとへともなひ行。床に入しよりしてあいぼれの思ひの山。なさけの瀧のおちあひて。跡先も」（八オ）なきむつごとかたり出すに。はや一物がかしらをふりておい出。はり切やうに。心いそがしく成て。いふことの葉もしどろなれば。夜着引かづきいだきあふ。さり

ともうまきはだへかな。ふく〳〵とふとりて。股のまはりのあたゝかさ。手をやりて。そこさぐれば。おぼろなる毛のほとりまでうるほひなかれて。えもいはれず。やがて打のぞかせて見るに。もどかしくや在けん。下よりひた物持かくる。猶ひかへめにして。ちよこ〳〵とあいしらへば。もだへ出てためいきをつぎ。ひしとくみつく大かたに待わびさせて。なかばつとこみいれたれば。ぬれ〳〵と流れ出る陰水に。こぼ〳〵と鳴音の心ちよさ。ふみとゞむるに所なく根まで。ぬつととゞかし。畳の上をすりまはせば。女は久し」（八ウ）ぶりのやりくりといひ。ことにすぐれたるすき人なれば。そのよい心どふもいへず。手をちゞめ足をのべ。しめつゆるめつすゝり上てなきむつかる。互にめづらしければ。ひたかへしにむしかへしける程に。なが〳〵敷秋の夜も。いたう更行はちからなく。きぬ〳〵の袖を惜て。本の所にたち帰る。よきかよひぢをもとめしより。雨の夜も風の夜も。ひとへにかよひ馴ける程に。始の程はふかく包て。人に色香も見へざりしが情つもりては。わざくれ心の出る習ひ。かたらぬ恋を。よそにさとりて。あれの是のとさゝやきまはりて。心をつけしに。かつらきの神ならぬよるの通ひ路あらはれ。にくきものにおほしけれど。慈悲ふかき情心から。男はいとまくだされぬ。」（九オ）

挿絵」（九ウ）

挿絵」（十オ）

おらんは女のこらしめにと。長く黒かりしかみを。もとゆひぎはより切て。やがて追出し給ふ。うきが中にも。すてかたきはいのちにて。はづかしながら又。ふしみのやね屋のもとへ立帰りぬ

好色日用食性昔物語　巻之一

(外)恋の分物語　好色にち用食性　二

好色日用食性昔物語巻二

㊂恋の似せ若衆本来は女　付り　色にそみやすき墨衣有

本来空の一物は。香もなくおともなし。卵のふは〳〵は生もなく。かたちもなしと。悟すませしぼんさまも一度しめつけられたる女の味には。座禅の床でも。思ひいださるゝ物かとよさてもおらんの方はさりともとたのみし。宮づかへの家を追出されてふしみなるやね屋のもとにひとり月日をおくる内にもびくに寺とは思ひもよらず一儀の道は。なをさかんに好色のうき世をわたらん事を思ふ夜すがら。かきなで見れば髪はきられてみじかくかもじそへんもかなはず。いかゞはせんとおもひわづらひけるが。こゝによき事こそあれ。此まゝわかしゆの姿となりていかな」(一オ)らんかたへもま見え。そのゝちあらはれなばそれまでの事と中ぐゝり。きる物をうりて男もやうにしかへはかま脇指ゐんろう迄とりそろへ。立ゐ物いひこしのふりあひかしこき心ににせたれば今こそはいかなる水が見たりとも。女とは見へず。わかしゆなりけりさてぞ出入だんな衆のとり持を頼ある寺の小性のわけよき事に有付ぬ住持は四十あまり色赤こへふとり仏の道は酒にありと明てもくれても是に長じ二時のかんきん素面にてつとむる事もなし此たびかゝへし小性うつくしさたぐひなく。あくまで心にいりたれば。名を一弥とよびてよだれ。をながし。としてこうしてとひたすらにぬれかゝれど本心酒にうばゝれ其間五日ばかりは。つゐに一儀のわけをたてず。ある時非」(一ウ)時すぎてゑいごゝちにかへられしが。おくの一間にころもぬぎすて。まくら引よせ。一弥はどこにゐるぞ。茶ひとつくれい。こゝがいたみてしたるひにこしをうてとよばるゝ。あいといふて。そばへよれば。すゝきのごときとろ〳〵目して。一弥。こゝをさすれ。そこをなでよと。うち股のあたりをさす

らせ。ふとく大きなる物を。でかしたてゝ一弥是はなんとした物であらふとの給ふに。かほ打かたふけ。わたくしは存ませぬと。につとえみたるよそほひ。もゝのこびあれば。住持も心すゞろになりて。それはつらしさりとてはと。いだきふせいどころをかいまくりあげつばきよいほどにねやしつけ。ずつとおとづれかくれどきしみてはいらず。のふそれではわるふござります。わたくしのよい」(二オ)

挿絵」(二ウ)

挿絵」(三オ)

やうにいたしませうと。まへよりも手をまはし。おもふ矢つぼにおしつけ。よふござりますよといへば。住持ははづみきりたる。たまくき。先のきしみたるにいとゞせかれて。よいといふやいなや。たゞ一いきにとおしかくる。もとよりうらみちにはあらぬ。玉門にたつふりとうるほひはあり。ずつほりとこみいりしより。すいこむやうにおぼへぬれば。今までかやうの文珠のながれ下されたることなし。さて〳〵是はいかなるおもいでぞと。しやうぶをながふおしかくる。一弥は此日比中たへての一儀めづらしくしかもふとくいぶせき物にこすりまはされて。そのよい心いはれず声をあげてよがらんとすれど。女といふをさとられしと歯をくいつめてこらへたれど。ねまてぬつととゞく時。身をもだ」(三ウ)へてしめなきに泣。住持女とはゆめにもしらず。わが一物の大きなるに一弥がくるしがるよと用捨はすれど。此あぢのよいのにかんにんのなる物かは。其まゝにてむしかへし給ひけるほどに。一弥はなをいきもきるゝばかり。たゝかひつかれて。此比のうつきをはらひぬ。是よりして住持は。いくたりのわかしゆにもあひぬれど。かほどまて心よくうけておもしろきはなし。つねにねんずる。ごく楽せかひへうまれたりとも此心ちにはよもまさじと。夜も昼も一弥なくてはあぶらあげのたうふも口にいらずぞ有ける。あるいとすゞしき夏の日。山ほとゝぎすのおもはくらしく。ひがし山へととび行折から。一弥もともに奥の間に

とぢこもり。いろ〳〵のぬれのあまり住持」（四オ）の給ひけるはおよそわか衆の道に。九つの味あり。ちごたん。わらがき。永平。清水。めりやす。竹のつゝ。牛尻餅尻番匠尻といへど。それにも勝てあればわた尻にてぞあるらめ。又わか衆のひきよくの内に。女はちや臼と云て逆をなし。衆道は梵天とてあをのけて逆をなすよし昔よりき、およびてつゐにさうした仕組をせず。あはれそれをゆるしてよとしきりにそゝり望たまふ。一弥はその所のあらはれんことをおそれてうけひかねど。いやといはれぬやうにいひかけられ。よしや此上はあらはしぎぬの。身をたつともこうしたわけからはと思ひ定さてつがもない事ばかりと打えみながらひしといだきつきたれば。そのまゝ上へのりかゝりて。かの」（四ウ）ぼん天をはじめ。つよくいかりて我ながらいぶせきを。おしかゞめてさしあてがふ。前には何のさはりもなく。毛のうす〳〵とはへながら。うつくしくむつちりとふくれたる玉門にてぞ有ける。住持大きに肝をつぶし。さては市弥はまことの女にてありしを。何とて今まではつゝみけるそ。大底の尻とは愚僧もおもはなんだ。此上はとてもしやうじんのおちつゐでにと。ぬつとなかばさしこみ給ふ。女のわけもこうしやにて。ひだり右上と下。あさくふかく手をつくす。一弥はつゝむけしきなくうまれのやうにこしをつかひ。手をくみはないきあらくそゞろ心に。のふ其うへのかたを。あゝしんきやと身をもむにながれ出る陰水はしら玉か何そとあやしむまでうら道へつたひふとんへな」（五オ）がれてぬれ〳〵となりたるに。ぼんさまもうかれたちて。根までをします物する時。一弥はしきりに身をふるはし。肩にかみつきしがみつき。きびすはぼんのくぼへあがりて。一間のうちをあなたこなたへ持まはり。互にうめきさけんで。やう〳〵やりくりはおさまりぬ。かくありてより後は。朝夕のつとめも。かいやりすて経よまんよりはふたりねたるがましじやと。斎にも非時にもおこなひけるほどに。いつしか一弥青梅をこのみ出て。お中の形いな物に。人の目立ほどなれば。此所のすまひ

かなはず。あるしづかなる町のうらやをかりてうつりけるほどに。住持のちぎりたえ〳〵に。さびしき秋に。なをさびしさをそへて。独ねの枕の上にむしの声を。聞ふかしけるぞ」（五ウ）

挿絵」（六オ）

せんかたなき

㊃流あひたる恋の湯の山　付り　情を作る後家ふたり有

壁に耳。樞に目のあるといひしはまことなるかな。さてもお蘭のかたは。心をとめ似せて。市弥と呼れし若衆姿。たれしる人もあらじと思ひしに。心の外のくわいにんにあらはれて。寺のすまひもかなはず。彼住持のはからひにて。あるかたのうらやをかり。下女ひとりめしつかはせ。身ふたつになるまではと。月日をすぐしけるほどに。と、まらぬ日数つもり。あたる十月あまりに。やす〳〵と。玉のやうなるおのこ子をうみおとしぬ。かくとしらせ申に。出家の子孫何にかはせんと。金銀つけてふつうの養子につかはす。されど猶うき名のみたかくたつなみの。ぬれぎぬの」（六ウ）そでほす日もなければ。住持も今はせんかたなく。御らんかたへわけ。よいほどにたてて。がてんづくのおいとま出れば。ちぎりも今はすゑの松山中たえにけり。さればなれし住持のいとま。子のわかれ。ひとかたならぬおもひに。こりて。さりとも仏の道へも入べき身の。左はなくて。ひとりうみたるあとは。猶一儀にさかり出て。いかならんかたへもま見え。又よきおとこを持て。心のゆくほどやりくり。七十五日のどくいみのうさをはらさんとおもへど。いまだかみながくそろはずして。今の姿をいかゞはせんと案じわびしが。げにやこの比の。人の心はおかしくかはりて。たゞ後家のみ好もしくおもふ折からなれば。此俤を其侭にと。かしこくもはからひ。みじかき髪を中にてそろへ。うすげせうかねぐろく」（七オ）下は黄むくの色こきに。上はむらさきの無地。引ちがへ。ほそ帯しどけなく。前にはさみて。八もんしの腰ひねりありけば。上まへばつとふきかへり

て。白くきよらなるゆぐ。ふともゝの辺迄見えけるほどに。見る人心をうごかし。魂をとられ。思ひをかけていひわたれど。なまなか今は心しやれ。水になりて。身のかたづきを心にこめ。うはきなるかりのなさけなどは。中〳〵おもひもよらず。たゞあさ夕達手をつくして。世の人の恋草のたねとぞなりける。されば水はひきゝにくだり。火はかはけるにつく習。おなじ心の後家の友。都のあさぎとよばれて。いろふかき女あり。此おらんとはわけて中よく。ちわ文の書様ほれぐすりのだんかうにも。心を置ぬほどなりけるが。すこし」（七ウ）持病にいたはる事あれば。やうじやうのため湯治せばやとおもひたちけるに。おらんもいさといざなふ。おもへば産のあとのわざにや。おり〳〵の土用八専きのへね。かのへさるを。づつうにおぼへ侍るに。よきつれとよろこひ打つれ。彼温泉の山につきぬ。此所のやとばさま〳〵に。口の間。おくの間二かひまで。一間〳〵を襖にしきりしつらひて。湯治の内あたひをきはめ借す事になんありける。ふたりの後家すがたも。とある宿やの一間をかりて。一まはり過二まはりの比になれば。相ずまひたがひに顔を見しりあひて。茶を送りたばこの火をもろふまでに心やすくぞなりける。それが中におもてのかたのざしきをかりてすむ人を見れば。とし比四十ばかりの」（八オ）男の色あかく鼻たかく。ひとりはほうしにて。医者らしき是もおとらぬおもざし。あはれ此ふたりの男こそ。一物ふとくつよ蔵ならんと。ふたりの女めきゝして。あはれえにしもがなと。心をくだけと。かくといひよらんよすがもなく。日を送る。おとこの方にもよのつねならぬ。後家姿に思ひみだれゐけれど。多き人目をはゞかりて思ひながら。色にも出さて過ゆく。ある夜人しづまりさよふけて。軒うつ雨の音さへばら〳〵とさびしき比。独の後家きたりて。彼医者のいねたる。襖をたゝきよびおこす。たれにやととへば。いやわたくしでござんす。つれの女。宵より心ちあしきとていたはります。ちか比御むつかしながら。御医者と見とゞけたのみまいらせ候といへば。旅は

やまひこそ猶つらけれ。」（八ウ）やすき事と打つれて来て見ればおくのかたにびやうぶ引まはし。ともし火をそむけふとんかさね敷よるの物とりさばきし中に。うつら〳〵起もせずねいりもやらで居るけしきなれば。鍼にてもさし申さんと立より。脉をとらんとすれは此女法師の手をじつとしめて恥かしながら此比御ことをいとおしくおもひそめ。わする、隙もあらずおもひ死なんよりはとかくはからひまいらする。まことにさもしきわが姿いやらしく。御気には入ましけれど。それが恋のならひ主もなき此身なればかたさまに。まかせますといだきつく。こなたよりもとおもひしかど。そさうなる事もやとひかへゐける折しも。寺からさとへのあいさつ。かたじけなさいふはかりなく。辞儀にやはおよぶへき。」（九オ）

挿絵」（九ウ）

挿絵」（十オ）

此方の思ひのほどもいかてか。君におとり申さんと。帯引さばき。のりかゝり。其はだへをさすり見れば。むつちりとしたるし、あひ。その所へ手をやればつねの玉門より。はるか上のかたにつきて。さねたかくほじや〳〵とせし。毛のあたり。はやうるほひしめりて。えもいはれず。かりたかくいかりたる物をおしあて。ぬつとすゝませ入る。されは此ほうしの持物。女の目きゝにたがはず。ふとさも長さも六寸にあまる斗なれば。しばしきしみて。女はかほをすがむる位なれど。ながれ出るわき水の。ぬれ〳〵となりてなかばぬつと入たる。其きみいはれずこしをつかひしがみつき。のふ其おくのかたをついて〳〵ともだゆるを。上手をつかひあいしらへば。絶かねて。あゝしんきや。どふもなりませぬと。かたをつめり。口をすい。うつゝのやうに」（十ウ）成ける時ずつと根迄とゞかすれば。のふ是はとのり出。一間の内をあなたこなたへ持まはる。上よりは又物する音のごほ〳〵と。ふとも、のあたり。へそのもとはゐん水ながれてわけもなさ。おとこは去聞へある兵にて。数の限もなくむしかへしける程に。さしもはりつよき此女。今はたんのふし

ましたのふ〳〵としめなきに泣むつかるぞ心よき。此間久しければ。つれの男いぶかしく。物ひとへこなたにたちぎけは。此女のよがる音かんにんならず。独の後家。次の間よりさし覗も、尻になるを。幸とうれしく。物をもいはずおしふせれば。此後家哀男もがなと待わびたる折なれば。手間もとらず。あをのきに臥けるを。かいまくり上。えしやくもなくさしこみたれば。ぬら〳〵とながれ出るより。わけもなくとりみだるゝ。此おとこも。すぐ」（十一オ）れたる腎はり。ひきよくを尽に。人めも恥もわきかね。ふすまのあなた。こなたもろ声に。泣やらすだくやら。暫して一儀は止ぬ。かくて逗留の内。たび〳〵よい事しけるが。二人の男やもめにてありければ。両方ともにふうふになりて。男のふるさと難波がたへつれくだりぬ。扨も法師の一儀の上手さ。よがり薬さま〳〵をもちひ。殊に白ずいきとやらんいふ物を。玉ぐきに巻てやりくるに。絶がたくさしも好色ぶ双のおらん。たんのふし。今ははや床入に是より上なき事を悟。外の男にま見えず。ながきえにしをむすひて、ゐんらんの道をとまりけるぞふしぎなりける

好色日用食性二

（外）恋の分物語　好色日用食性　三

好色日用食性昔物語巻三

㊄契は堅石山詣　付り　恋も垣根も破たる有

一寸の虫にも五分のたましひ。六寸の玉くきは又。人のしゆびをやぶるといひし古ことおもへば。いやといはれぬ事かな。爰に須磨の浦太郎は。母にすてられ。姉うへには。道のちまたの別をなし。行衛もしらぬうきふねの。よるへ定めぬ。村しぐれ。雲介となるべき身の。天道まことに人をころさずふしぎのえんをもとめ。さゝ波や大津の町の針やの弟子にぞありつきける。名を与四郎と呼かへられて。朝な夕なのつとめ。本より天の精を得て生れつきたる好色おとこ顔かたち人にすぐれ。色しろくぼつとりと。万女のすくふうぞくちは文うつくしく書なし。ことは」（一オ）やさしくぬれありて。目つきに物をおもはする。声はうぐひすのはつ音をかりて。時のはやり小哥を。相坂山の松風に吟すれば。きく人心をかけぬはなし。頃は水無月二十日あまり。瀬田の河風いと涼しく。星か川辺のほたる見も。今はすがりて興なきに。いざ石山にまうでなんと。あたりの内儀むすめ娘。男とては弁当もち。さては与四郎御とも。酒よにしめよと。になひつれて。穏絵むしろ敷ならべ。酒とり出しめぐるほどに。おもしろのうみづらや。かゝる景が。京にとてもある物かは。此酒があがりかぬるに。与四郎ひとつうたやと。おくさまの仰あれば。ゑたる所の一ふし。うらみらるゝ、もうらみし人もなどゝ。こゑほそやかにうたひ出せば。比叡や三上の山ほとゝぎすも。音をはぢぬべくおぼへければ。」（一ウ）さても〳〵与四郎はかくしげいや。うつくしのこはねやと。女中一度にあつとかんじて。是より猶酒事にぞなりける。さても与四郎が頼たる。針やのとなり。やまぢ屋といへるかたのむすめは。こぞの春去かたへえにしをむすびありつきしが。男にくみの心つよく。

新収　浮世草子『好色日用食性』

かの家を逃出。おやざとにかへりゐけり。けふしも人〳〵にいざなはれ。心ばらしにとて出給ひしが。いろふかきむすめにて。与四郎が俤をちらと見しより。かはゆらしく。何とやらん思ひみだれて。とやせんかくやはと。心のうちいそがしくなりけるに。猶一ふしの小うたになづみ。身にしみわたりて。あはれしゆびもがなと心がくれと。人めのつゝましさにとりまぎらかして。次第にめぐる小さかづき。かずかさなれば。さげ重の酒とく」(二オ)

挿絵」(二ウ)

挿絵」(三オ)

にのみ切。下の茶やより。小樽をかよはせ。うかれたちたる女中むかしぶしを。かすりうたひて。ざわめくほどに。いたうゑい出て。あとさきもしらず。まろびふしぬ。よきしゆびと与四郎はかのむすめのうしろへまはり。幕ごしにそといだけば。其とほりもの。御尻を幕の外へ出す。此かたじけなさ。かいまくり上。つばき物して。うしろさまにぬとさしこむ。娘はさきより心うかれゐける上。酒にはいたうみだれぬ。なかば入るより。其よいこゝちえもいはれず。かほにたもとをおしあてて。しのび〳〵にすだきたる。後よりは好色無双のおとこ。いぶせき物にて。すきまもなくおしかくるに。絶かねてしめなきにすゝりあぐる。たがひにはづむ拍子に覚へず。幕のつなをおし切。ゆら〳〵とすれば。人〳〵」(三ウ)おどろきゆめ打さますにせんかたなく。其わけなかばにしまふて。わき道より帰り入る。かくする内に三井寺のかね。七つをつぐれば。女中みな〳〵よろつきまはる酒のあしもと。這共あゆむともなく。大津の宿につきて。家々に立わかるゝされど彼娘のみ名残をしげに与四郎か跡を見かへり給ふ心ぞやるせなき。さても石山にて。はやはざのふうみ与四郎もわすれかねて。ちゞに心をくだく折しも。娘の家のこしもとに。十四五なる小女のありしが。つねに与四かそばへ子を守来てさいくのじやましてあそぶ。能よすがと嬉しく。小女にうつくしき物などとらせ。

すかしこみて思ひのたねを書くとき。ひそかに娘のかたに送る。娘玉づさひらき見るに。いとあはれなる心のいろ」(四オ)くろみ入ばかり書たり。こなたのなつかしさもおとるへきやはと。暦まさりの返事。なを〳〵書に打つけながらも。たがひの恋の関路の。垣は一重にまばらなれば。こよひふけゆくかねの音。高観音の八つをあいづに忍び給へ。その折からわが身も。たちむかひ申さんと。ねん比に書たる。うれしさに。きもつぶれ。むねの内とけ〳〵と。其夜の更を待わぶるほどに。拍子木の音。むしの声。しん〳〵として。うろたへ鳥の。くゞ音を出す比にもふけ行ぬれば。おしへしかきねをくゞりて。桐の葉の覆ひたる。そと井のもとにたゝずめば。娘も寝巻着ながら。小づまかいどり。すこしはおもはゆげに。立むかひ物をもいはず。うちまねきたまふにたちより。耳に口あてゝさゝやきながら。手に手をとりて」(四ウ)娘のねやにしのびこめば。瓦燈のひかりほのかに。人音もきこへず。其まゝ蚊屋の内へともなひ。まくらならべて。此ほどの石山まうでのわけの残おほかりしことなど。そこはかとなく互にかたりあへば。例の曲わろき一物が。女の匂をきくやいなや。しばらくもこらへず。下帯をはづれ。帷子をはねておどり出れば。たまられず。娘のかたも玉門よりこぼるゝ涙をつゝみかね。かほあかく打ひろげて。しどけなく見ゆれば。先あいさつをさし置。かたびらをかいやり捨。ひしといだきしめ口などすへば。あなたにもね巻のそでかきのけ。丸はだがなる其はだへしろく雪のごとく。としは十九の花ざかりむつちりとあたゝかに。彼所をさぐり見れば。ほそき毛のゆびにさはりて。うるほひ又しつほり」(五オ)なり。やがて上へ打のり。ふとくいきほひたる物をさしあて。そとのぞかせてうなづかするに。あゝしんきやともたへ給ふ所を。ぬと半さしこみ。上下ひたり右の上手をつくすにたへかね。今そつと其上のかたをと。物ごのみしてもちあぐるひやうしに。おしまず根までつめかくれば。しきりに歯ぎりし。身をふるひ。しめつゆるめつむつかりける。かくす

る間久しけれど。飽心やなかりけん。なごりおしげに。かきまとひてはなち給はねば。又とりかゝりはじめけるに。ながれいづる玉水わきかへりて。とゞむるに所なく。ゆぐをかさね。はながみを敷むしかへし思ふまゝにと夜半のころより。短夜の明がたまで数は五つにして少たんなふの気味なれば。今こそきぬ〳〵の袖引わかれ。本のところにたちかへる。是」（五ウ）

挿絵」（六オ）

よりかよひ馴たるうら垣。たび〳〵にしのびてちきりけるが。いつとなく娘の腹いな物になりて。人の目にたつほどなりければ。与四郎今は此所にも足をためず。針屋のもとをしのび出。心ぼそくも緒ざしのたび。真竹のつえの夜をこめて。あづまのかたにぞおもむきける

㈥比丘尼袖引雪の黄昏　付り　厚き情の火燵ぶとん有

人舌わづかにして万行をそしり。一物ほねなふして一生をあやまるといひしは。与四郎が身にぞありける。かりそめながら。此とし月住なれし。針屋のもとを逃去て。又もとの浦太郎の身となり。大津の宿を跡になし。めなれぬ鄙の道すから。東のそらにおもむきゆく。さなきだに旅は物うきなら」（六ウ）ひなるに。のこし置たる娘の事。思ひなげゝば。心みだれ。ゆく道もさだかならねど。日数ふるまゝに。するがのくにうつの山辺になりぬ。むかしもわがことく物おもふ人のありて。ゆめにも人にあはぬなりけりと。詠ぜしことなど。思ひつゞくるに。心なぐさみて。ふじの高根をながめ。なをゆきゆけば。春ながらさへ帰る空。雪いたう降出て行さきも見へず。日ははやくれかゝりて。物の色あひもうすくなれば。とある門前に立より一夜のやどをたのむに。奥より四十斗のひぐに出て。浦太郎をつく〳〵とまもり。扨うつくしくかはゆらしき若人や。いづこいかなる人ぞととふに。宮古がたの者と申せば。いかさま此あたりにては見なれまいらせぬ京姿の。雪につかれ給はんいたわしや。御やど申」（七オ）さんこなたへと。男の袖をひかへて内へ入。ふしぎ

や打見たる所はよのつねの家ゐなるが。奥はひろく手を尽し作りみがきしひろえんを通り。いぬいとおぼえし局にいさなひゆく。こゝに二十あまりと三十斗の。さもあてやかなるびくにふたり火燵にむかひゐたるか。浦太郎を見るより。やがていろりのもとにしやうじ。男をあたゝめ。料理とりそろへ。食をすゝめ。酒もぬるからず。あつからぬをしひて。盃の数かさなり。心ゆたかに身もあたゝかに。うつら〳〵ゐねふる比。びくにどち何やらん。さゝやきてうなづきゐるよとおもへば。彼四十ばかりのびくに。太郎が手をとり。一間なる小ざしきの。伽羅のかほりのしめやかなる所につれゆき。何とも物はいはず。男にいだきつき。てまろび転るもとより好色一」（モウ）の男。こはめづらしの御たくせんやとおしふせ。両足をかゝへながら。つよくきざしける物を。つつと半こみいれたれば。いきつぎせはしく鼻すゝりなどして。身をもだゆるに。男は此道遠さがりて一入おかしく。勝負をながふ物しけるほどに。比丘尼は歯ぎりし。身をちゞめ。のふ〳〵と泣出けり。よろこびのうるほひ。間なくしたゞりてわけもなさ。其ほとりはぬれ〳〵となりて漸〳〵事はしづまり。大息ついで起あがれば。三十斗のびくに物ひとへこなた迄来て聞ゐて。心ちよさかんにんならず。やがて男の上へのり。物をもいはず。こしらへかゝるを其まゝに。茶うすにしてぬとすゝます。比丘尼ははじめのわけを聞て其所わきかへりたる事なれば。一さゝへもさゝへずぬら〳〵と」（八オ）ながれ出るよりしてわけもなく。我がたよりこしをつかひ。思ふ所をすりまはしける程に。暫の間に女のかたは。十たびはかりいきけれは。腹の上をおりかねて。ひたふるにため息つぐに。ゑんれいたんを用ひたればやう〳〵人心ちに成て。びくには外へ這出ぬ。其次ははたとせばかりのびくに。是はとしばいもわかければ。さすがはづかしくやありけん。其所へはきたれども。顔をあかめおしうつふきてゐけるを。手をとりて引よせたれば。あふのきにふしたるを。帯引さばきのりかゝり。その所をいらひみれば。此玉門

はるかの下につきて。きのどくさ。やがてまくらを尻にこふで。前の一儀にかちほこりて。いよ〳〵いかり出たる物を以て手ひどくこみいれ物することに。ごほ〳〵と其所のなるおと。」（八ウ）障子のあなたへもれぬべし。まだ水〳〵としたる若ひくにの上々開の其味どふもいへず。是にこそぬきもやらでひたがへしにむして其夜の一儀は是にてやみぬ。さてもびくにたちの。なさけふかく物し給ふに。三日はこゝにとゞまる。其内はよる昼なしのやりくり。其所のにほふがあれば。わき香のくさきあり。みつちや顔。おもくさがほ。あかゝり足。さめはだ。いろ〳〵のびくにゑりきらひなしに十五人毎日〳〵つとめけり。それが中に三十あまり。ほつそりとしたるびくにの味こそすぐれたる物にてありけれ。一儀にしかゝり。白くきよらなる。うちまたをかきはたげで。入ぬ先より持かけしを。ちくとのぞかせて三つ二つおとづれたれば。其うるほひふとんにながれて。もどかしくや」（九オ）

挿絵」（九ウ）

挿絵」（十オ）

在けん一物を。あなたよりにぎりて根迄おし込しよりよろこぶ事いふはかりなく。久しく中たへぬればめづらしきなどふるへる声してもだへむつかりふとんの上をはいおち。二三畳がほどはもつてまはり。二時もかゝりてやりくりは終し。此びくに斗残多今一たびとおもへど頃日よるひるのつとめに。さしも腎はりのおとこよはりかくて日数を経はいのちのほどもあやうし吸あげられぬ前にとかず〳〵のびくにたちにいとまを乞ば。さま〳〵のはなむけ金子も道中のためにとて数はしらす壱包給はる。夜あけて男の出るは人めつゝましと野寺のかねの八つをつく頃たち別ゆけば。びくにたちは送り出て。名残はつきぬ花のぼうし。くち」（十オ）をすへばだきつくあり袖ひけばさゝやくありあられぬ事のいとまの袂さらばおさらばといふ声もへたゝりゆく。道のほど五七町も行てとりおとしたるづきん思ひいだしてとりに帰りありし家ゐをたづね見るに局と見へしは松かへで木ぶかくしげり

て夜あらしの音のみぞ残りける。此ふしぎさゆめにやありけんうつゝとやいはん。浦太郎もわきかねながらまた東のかたへくたりぬ

好色日用食性三」（十一オ）

恋の分物語　好色にち用食性　四

好色日用食性昔物語巻四

㊐縁は可笑愛染の宮　付　餘思ひの風呂敷包有

えんにふるれば唐物。めづらしき物を食しては。七十五日生ますといひしは左もあることにや。扨も須磨の浦太郎は。降こめられし旅路の雪。人のなさけにのがれ。ことにはかはりたる好色のまくら。初ものゝびくにたちをやりくり。おもいで申日を経にけり。かくても住はつべき身にしあらねば。又あづまへとおもむきしが。あまり夜ふかにたち出て。ゆくさきもおぼつかなく心ぼそければ。明はなるゝ空をまたんと。そこら見まはすに。みちのひだりのかたにつきて松たかくしげりたる森の内に。とりゐほのかにおがまれさへ給へば。いかなる神かはしら」（一オ）す。御燈のひかりにつきて。社へまいりゆくす

ゑの事などいのり。かたはらにたびゆたん敷いぬるともなくうつら〳〵都のことなどおもひわぶる折から。宮のうしろのかたに人音のきこゆる。あやしや里はるかなる此はなれ社に。さよふけてかゝるべしともおぼへず。いかさま是はきつね狸の。我をたぶらかさんとするなるべしと。星のひかりにうつし見れば。としの比はたとせばかりの女の。ぼつとりとしたるふうぞく。かほかたちまたうつくしく。かゝるいなかのはてに。かやうなるやさむすめのあるべきとも思へねば。所詮ばけものゝわざなるべしと。かたなをくつろげながらさしむかひ。たゞ今そこもとにたゝずむは。いかなるものぞ。きつねむじなのたぐひならば。まことの形を顕せ」（二ウ）さなくは忽さしころしなんと。あらゝかにいひのゝしるに。此女打おどろきたるさまに。またくさやうの物に侍らす。此あなたなる在所何がしの女房にて候。つれそひたる男うしろめたく。外にてかけをこしらへ置ておもしろすくのかよひぢに。我がふたりのまくらさびしく。扨こそねたましく成て。よな〳〵此神へ牛の時まうでをいたし候。ふしんはあらじ。これ御らんぜよとふろ敷包より出せし物を。御燈のひかりにみれば。いたゞきたるかなわ。らうそくの消しあとなど。今はうたがふべくもあらず。物かたりをきけば。いたはしやおとこの心のかはりやすきはつねのならひ。さのみ恨思ひ給ふな。世におとこひでりのゆくにてもなしといひなぐさめ。つく〳〵と見るに。始かいま見しよりは猶かはゆらしき」（二オ）

挿絵」（二ウ）

挿絵」（三オ）

めつき物いひ。かゝる女房を捨て外をかせぐいたづらおとこも在けるよ。あはれ此よひしゆびに。いひおとさはやとおもひきざしけれは。一物はやはねおこりてかんにんならず。やかで女の手をしめ。一じゆのかげ一河のながれをくむも。ふかきえにしとこそきこへ。まして今此御やしろにて逢まいらする事。ひとへに神のむすびあはさせ給ふならし。ゆめばかりの御情何かくるしからん

といだきよれば。さてもうはきな人さまや。是ばかりはゆるさせ給へ二道はかけませぬとがてんをせぬを。猶いだきとゞめ。さきほどばけ物のわざとおもひて。さしころしまいらせんといたせしかど。若人ならばいたはしやと。御いのちたすけ申せしおやそがし。にくしともおぼすなと。いふ〳〵もすそまくりあげ。うちまたへづと入」(三ウ)日比のはやわざ。ふとくいかりし物をさしあてたる。さても此おなご。夫に思ひすてられて。其わけはいつのまゝやら。おとこゆかしく思ひわぶる折からなれば。あゝわるひ事をとはいひながら。打ひろげてしどけなければ。男たよりよしとうれしく。つばきたつふりとねやしかけて。ぬとすゝめ入たれば。是ははやい人さまや。主ある物をきゝわけのなひと。いふより鼻いきいとせはしくすだきあへる。おとこは此比かずのびくにとなれたれど。物たらはぬやうにありけるに。是はかみあるすがたのめづらしく。心うかれ上下ひだり右。ふかくあさく。ひきよくの手をつくすに。女はしきりにいだきつき。のふそのうへのかたをと物ごのみし。そゝろごとに。さても〳〵今までは。我がおとこの物ほど能のはあらじとおもひしに。是」(四オ)はながくふとくやはらかに。はたへさはる其きみいはれた物ではござんせぬ。今からはりんきをやめて外のおとこをかせぎませう。迚の事にゆるりとして。たんのふさして下さんせ。のふ〳〵としめ泣にむつかりけり。此間に其所はわきかへりて。ぬら〳〵と出るより。ごほ〳〵となるおと。ゆぐももすそもぬれ〳〵とわけもなくぞなりける。されど女のかたにはなさず。せめて夜の明までと。なごりおしめば。又とりかゝりて物するに。女も今はたえかねけん。かみつきすいつきのり出など。ある時はゆめにおそはるゝやうなる事をいひて。うめきいきまきやう〳〵一儀おさまりければ。やゝ人がほの見ゆるころになりぬ。すこしははづかしき心ちに。たがひのいとま乞こはれ。やりくりしたるこしのなりふり」(四ウ)ふらり〳〵しながら。おのがさとへ帰りぬ。うら太郎は。おもひもよらぬよいめにあひて。

よろこばしさ。ひとへに此神の御かげと有がたく。よごれたる手。水ばちにてあらひ清め。ふしおかめば愛染の宮にてぞ在ける。扨は仏神も。わが好色の道をまもらせ給ひけりとうれしくもすゑたのもしく。ありし宮ゐをたち出猶ひがしの国へといそき行けり

㊅君が情は蚊帳に社あれ　付り　好色伝受夢中の箱有

神鑑くもらぬ所をてらすとかや。ふしぎに。愛染明王のちかひによりて。おもひよりなき時参さとむすめのはだへをふれ。其きほひにすぐにむさしの江戸にくだりつき。麻布といへるところに。かり店し彼びくにより給はりたる。金子とり出」（五オ）こま物などになゐありけど。やめがたきは此まどひ。あなたこなたの恋の山。いく野の道をわけありき。又ある時は金龍山をながめ過し妙国寺東海寺のかねの音。鈴の森の松のあらしを聞折もあり。かく好色のみちにまめなりければ。金銀も残ずくなになり。是よりすゑはいかゞ送らんと。ねざめ物うくあかしくらす。さても此家ぬしは。いとやの何がしとかや。たくはへふそくなく。下女小ものそれ〳〵にめしつかひて。家ゆたかなりけり。内義のとしは三十ばかり。むつちりと肥ふとり。こしひらたく酒ごのみの。一儀ならびなきこうぶつにてありければ。さいあひのおとこをふたとせいぜんに。すいあげてたうとひ国へまいらせ。跡はことし七つになるむすこをそだて後」（五ウ）家たてて。此とし月おとこのはだは。いかな〳〵おもひ切給へど。日かすを経るにしたがひて。わきかへるぼんのふの水。とゞめかね。あはれよからん。おとこもがなと心がけ給ふに。此うら太郎が鼻つき。すぐれて見事なるに。とやかくとおもひをくだき給へど。人めの関おほく。まゝならねば。心の外に過ゆき給ふ。男もさすが恋しる水の後家の心をくみて。折もあれかしとうかれくらす。いつの比よりか浦太郎さびしき夕〳〵。あんまの手わざをならひて。けいらくをひねりありく。後家うち聞給ひ。よき便とうれしく。ある雨の日のつれ〳〵。ちの道のわざやらんかし

らがおもきに。借屋のおとこよべとめさるゝ。うら太郎打よろこび。使とつれて参りたれば。後家はおくのかたにびやうぶ引まはし。打ふし給」（六オ）

挿絵」（六ウ）

ふ御そばへより。脉などうかゞひ。それより。せなかかたさき。こしのまはりひねり申せば。手品も御気に入てさて〳〵こなたは聞しよりも上手かなとほめられ。ちと御中のやうす見まいらせんと。後家をあふのきにふさしめ。むねのほとりから。乳のあたりさすり見れば。むつちりと白きはだへ。真わたにさはる心ちえもいはれず。折ふし人かげもなければ。そろり〳〵天樞のあたり毛のはへぎは迄手をやるに。後家はふところにて男の手をしつとしめて。其したのかたのつかへにあたる心がよふてとの給ふほどに。心しりの男。やがてしもへ手をさげて。玉門をいらひたれば。ふつくりと。まんぢうをかさねたるやうなるし、あひに。うるほひ大かたならず。人さしゆひをなかばぬといれたれば。ぬら〳〵と」（七オ）ながれ出てわけなく。ひた物ためいきをつぎ給ふに。かんにんならず。前引まくりのりかゝれば。間もなくかよふ人音によいことはせず。はねおこりて帆ばしらのやうなる物を。下帯にはさみなどして我が宿へ帰りぬ。是よりたび〳〵めしよせられて。万心やすくなりゆく。ある夏の夜のむし〳〵と風まつ比。又れいのづつうおこりしにとてよびにきたる。下心のあれば。其まゝ御見まひ申に。こしもとの女出て。あの蚊やのうちへといざなふほどに。まいり入たれば。後家はけうそくによりながら。せなかのかたをひねり給はれとある。ひごろの手練ひじゆつをつくす。その内に後家のかたは。ひた物尻をもたげて。おとこのかたへさしよせ給ふに。一物はりきるやうになりて。とゞむるに所なく。かやの外に」（七ウ）はこしもと独。こいねふりしてゆめ見るばかりなれば。いとうれしく。ふとくいかりし物をずつとすゝめかけたる。うしろさまなれば。玉門のしたつらより。さねがしらの上つかた摺てかいはづれたるをみづからにぎりて其所へあてが

い給ふに。ぬつと持かけて。半入るより手ひどく物すれば。後家絶がたくまへなるけうそくにしがみつき。はないきあらく。いきつぎかねてわけもなくとりみだれ給ふ。此ま丶にて二つ三つ物したれど。物たらはぬやうに。とゞかぬ所あれば。迚の思ひ出に。本手にとこのみ給ふほどに。やがて上へのりかゝり。わざと内へはいれもやらず。二三度四五度ぬめらすれば。あゝきのどくやと。持あげ給ふひやうしに。すつどとゞきたれば。のふこれはとしがみつき。こしをつかひ足をのべ。身をふるはし声」(八オ)をあげ。しんきやと泣むつかる。後家は此ふたとせ。其わけをとほざかり。いつか〳〵と思ひわびたる折から。いぶせき物にこすりまはされて。ながるゝ水。へその上胫のしも迄ながれ〳〵て。其ほとりはぬれ〳〵とぞ成たる。さても此おとこの持物。ふとくたくましき事いふはかりなく。しかもつよ蔵のやりさき。毎日毎夜入づめにしてもよはることなく。さしもすけべいの此後家。今はたんのふして。即うら太郎とふうふのかたらひ。おさあひのうしろみして。家とみ。ゆくすゑながくちぎりけり。さればうら太郎も世にふしぎに。生れ出たる好色男。是迄逢ける女千人にあまりたれど。此後家の玉門ひろからず。せばからず一儀をおこなふごとに。まろき玉三つうかひ出。おとこの物をもてなす気味。すいこむやうにて」(八ウ)えもいはれぬふうみ。おとこたび〳〵やりくりても。くたびれずなん在ければ。これぞ上〻開にてうへなきことをさとり。此後家にて好色をとゞめけり。ある夜又一儀をくはだて。や丶久しくもみあひくたびれ。打ふしたるゆめに。とし比五十ばかりの男枕もとに立より涙をながし。なつかしの浦太郎や。我は是すまの浦右衛門とて汝等が父にて有しが。此三十年いぜんうき世をさりてめいどの旅におもむく。されど色このむ心ふかく。其道にりんゑしぬれば。母こそしらね。夢に通ひ。男女のふた子を産ぬ。さるゆへありて子ども又好色の道にふかくまよひし是を悲しみて。母はぼたひの道に入。今は都の西みなみ。よし峯と云所に。いほむすびて一向仏の

名号をとなへぬ。姉なりし」（九オ）

挿絵」（九ウ）

挿絵」（十オ）

らんの方も。恋のふちせのふかさ浅さ。わたりくらべて。今はなにはがた。あしからぬ医者の女房になりて家ゆたか也。こゝにふしぎの書物あり。号て好色日用食性と云。是男女交合の妙。色道初心の指南なり。凡人の命に長短ある。前世の果報によるといへ共。ひとつは又養性の善と悪とによれり。我此道をしらずして非業の早世くゆるにかへらず。かるが故に一冊の書を授て汝が。寿命をながうせんことをおもふ。よく〳〵読じゅくして。妙術かくのごとくおこなひなば。よはひながく久しく。たもちてかはる色あるべからず。いとま申てさらばやといふこゑばかり。耳にのこりてゆめさめけり。あやしくもふしぎながら。あたりを見れば。ひとつのきりの箱に。好色日用食性と」（十ウ）書て内一冊の物を入たりひらき見れば。ありし教にたかはず好色一道の養性をしるせり。まことに父のあたへしかたみとおもへば手を放さず。能よみおぼえて。一儀を行ひける程に。まれなるためしにひきし。三浦の大すけがよはひも。はるかふもとのおひの坂。うら太郎は百五十歳をたもち孫にひまごに亀の孫末ほどさかゆる松の葉の

かはらぬ色

こそ

めでた

かりけれ」（十一オ）

好色日用食性　五

好色日用食性昔物語巻五

夢中巻　金之部

一金　一名黄金　一名小判　一名金子　又は一両　一はい　色さとのことば　金の性はかろく。諸事をとゝのふ補薬あほう成者もかしこくなし。万の物是よりなり始物なれば。疎につかふべからず。其色黄にして人の内證に入。何にても不足なる物を調重宝の第一也。是をつかふに先。反故に包ては。米や酒や其外一切買懸の滞をはらひ。奉書に包つかひて。天神大夫のあげせん。しよ金のつかへをさる。されどつかひすごせば。金虚とて。しんだいの内かたがからに成。火動とて内證にてうちん程の火がふりて、一身恋のやぶれとなる事おほし。過不及ならぬやうに。其中を取つかひて。色道の養性とすべきことかんやう也」（一オ）

一壱歩　一名一かく　一名かどや　あるはちやうとくじ　又はやまぶき　壱歩は其性小判よりかろく。ねぢふくさ。はながみ袋にいれつかふ尤よし。小判と同万の物をとゝのふ補薬。多は太夫天神をかふ人花と名づけ。御気に入たる。大こ。やりて。やどや。おろせなどへつかはすに。小判はおもすぎて大尽のむねになづむ。此ゆへに壱歩をかろく用ひて。人の気をうれしがらせ。けいはくをいはせ瀧呑をさせ。一切人を能まはすの功。しるしはなはだし。是もつかひ過れば金虚火動の病を生じて。むすこは親のゐけんにあたまの毛のぬける煩。手代などは主人のしゆびやぶれて。日比のしきせ。皆はがれ。あたまに。あみがさといふ瘡をいたゝく。つゝしみおそれて養性すべし

一銀　一名しろか□　一名□□かね　一名つゆ□□□□　銀は其性おもくくたりて上へのぼらす」（一ウ）この故に太夫天神。女郎かたへはつかひにくし。壱歩とおなし補薬なから。其性かろき所あり。銀の能は重くたまかなれば。ふくさかう包などに壱ぶと等分に入用ひてよし。是をつかふには茶やふろ

や。当座ばらいの恋に用ゆ。あるひは気に入たる者に酒のませてとらする。是を銀花といふ。銀はくはしやにつかひてゆるりとあそばしやんせといはすの功あり。下女ふたせ女につかひて。せつたをなをさせりやうりにん。下おとこにもちひて夜更ての道おくらする能あり。猶つかひやうに功者あるべし能心へたまふべき物なりかし

一銭　一名鳥目　一名鵝目　一名おあし　百文をころり　二百文をさすまたと云　銭の性銀より又おもくしてふくさはなかみ袋に入ことあたはずかるか故に帯に」（二三オ）つけ。こしにはさみてふくめかす。其性さもしくて。恋につかふ事まれ也。たま〳〵恋さどちかくつかふといへども。大かたはしばゐの札せん。ゑんざ代などになり。いたりて恋につかふ能なし。但四辻の惣嫁には十五文二十三十文。それ〳〵にもちゐては。すみまへがみのわろ。下おとこ馬かたせんどうなどの。当分のゐんすいのつかへをくたし。うつ気をはらふの功あり。つかひすぐれば。げがんさうをやみ。とうがさしらみをうつるの患ありつゝしむべし」（二三ウ）

一下疳薬　げがんさうはおほくは茶や女。惣嫁をやりくるより生ず。たま〳〵外の地女に出合て煩は。毛のすさまじき女をやりくる時。おとこ心のせくまゝに。けがをすることあり。又はいたうよがる女。のふ〳〵と身をもだべ。こしをあげあしをのべのり出などする時。ひやうしちがひて。けがをかうふる物也。此時はやくとゞめて疵をいやさねば。むつかしくなりて後いろ〳〵の病を生ず　何にても目薬付て　やりくりの時すりむき。或はけぎれ。そのほか当分の疵を治するめう也。右粉にし。石砂わらのすさなどをとり捨。あとの土ばかり。にぢりつくるきめうの薬也

一奄怱薬　これにうへこす薬あるべからず」（四オ）

黄金　大分に入　男つき壱疋　心中一両　ちわ文　大分に入　上々きやら大ぶん入　きやらの油十両　右達手と隙

とを等分にあはせ。ぐんなゐ八丈嶋そのほか能きぬを衣にして毎日〳〵もちゆ

おやぢ　りんきある女房　後世心　むじやう

右のぶんさしあひなりいむべし

一淋病の薬　りんびやうはもと五淋。皆湿熱より生ずといへど。おほくはやりくりの時。すきの女よがり出て。あゝしんきや。もそつとゆるりとして下さんせなど。もだゆる時。おとこ。はやうらちのあくを残多がりて。ゆきかゝりたるゐんを。ひた物とめやりくるゆ〈出る物也。又□□酒ののちやりくりして必此病あり」（四ウ）

髪□□□男には反のかみ□　女にはおとこのかみ

右かはらけに入息をこめ黒やきにしさゆにてさい〳〵用ゆ

水の部

一陰水　ながれゐん　たまりゐん。陰水はおほくは十六七の比。そのわけの心気さしてより出る事とぞされば はしりゐんといふは。一儀の事を思ひ出し。あるはよそのやりくりの音などを聞て心よさのあまりてもるゝゐん也。皆いろうすし。又四十より上さては虚証なる女のゐんはたとひやりくりしてもうすし若壮の女のゐんは。こくねばり出る此ゆへにほひもつよし。されば一儀の前に伽羅をたくか又はかけ香の匂にてもとむる。女のたしなみなり。いかにおもはくの中にても。その匂鼻にいりて」（五オ）は千年の恋もさむる物とぞ。猶にほひをとむるひでん。こうしよく袖中抄にくはし

一井の水　井花水　朝一番に汲水也凡やりくりするに。男によりて玉ぐきをのぞますと。其まゝらちがあひて。門口でおれい申人おほし。かやうに早クらちのあくおとこ右の水。ちや碗に半ぶんのみておこなへば。ゆくことおそく女にたんのふさすることめう也。又月水ある女を物する時。つねの水にても。ちやわんにひとつのませ後。一儀すれば。やりくりの内月水きたらす

とぞ。しかし月水あるうちは。其わけをいむべし。女に大どくそれのみか。男の身もけがれて翌日は神まうでもならず。つゝしみて此□□□□はしかじ」（五ウ）

一ある人とふていはく。入子といふ玉門ありとまことなりや。答て云稀にあり。しかも上々開なり。是を行に先本手にしてやりくるに。なかば入てから。つかへたるやうにおぼへ。入かぬるをあいしらへは。くゞりなどをくゞるやうにありて。ぬととほる其気味あたゝかさ。おくより玉のうかひ出て。もてなす。たゞくはへてすいこむやうなり。あのかたにも玉ぐき奥へはいるといなやわき水ながれ出わけもなくとりみだれ。のふ〳〵と泣いづる。まことに上品の玉門なから。大切なるぞ恨なる。かゝる女はおとこに大薬なりと心へ給べし

一ある人又とふ玉門上につきたるを上開といひ。下につきしを。下開とかや云。されと下につきたるに。又ふうみのすぐれ」（六オ）たるあり此ゆへいかん。こたへて云。上につきたるを上。下につきしを下といふ□尤至極せり。さりながらひとつは男のおこなひ。やうにて上開もあしく。下開もよくなす事あり。たとへば。能うををりやうりするにあしくつかひなせば。ふうみすぐれず。さのみすぐれぬ。さかなにても。りやうりきゝたれば。其あぢはひよきがごとし。先一儀をするに。手をくみいだきあふはつねなれども。腹とはらとを合ては女のいきあひをおさへてくるしく。きのゆかぬ物なり。とかくしめあひたりとも。はらと腹との間をよけ。身をうけてやりくるべし。されど女のかた。きのゆく時はなる程しめつけ物するよし。扨下につきたる女を行に。枕を尻に敷といふ古伝あれと。始た」（六ウ）る女などに[さ][や][う][に]心やすきわさもなるまじきなれば此時男下へさがりて玉門の下のかたをつくべし十人に八人さがりたる開は。下のかたに玉あり此玉に当と悦出てゐんすいながれ上開におとらぬ味あり。下へさかりて下をつくと云功者ひみつ也

一或人又とふ凡やりくりは年に随ひ数の限ありや。答て素女論とやらん云書に。其程をあげたれど今の人にあはず。先生ながらにして虚証あり。此男愈一もくやりくれば十日もこたへてぶら〳〵とするあり左あるかと思へば。又実証の男ありて。一儀を三日せねば。むなづかへしてめいわくすると云人有是をおもへば。一ケ月に二度して能は二度。五度して能は五度とかくあたるを度としてとゞむる是養性の要也猶八ケの仕組をしるして房内の助となすのみ」（七オ）

内股乗

此手は女をつねのごとくふさしめ本手にしぐみ玉門へ玉くきをいれ女の左右の足をおとこの左のあしの内へいれ男のもゝにて女の両もゝをしめつけおこなへば玉門せばくなる故左右のかたをすりてえもいはれすゐんすいながれ出てよろこぶことかぎりなし

評にいはく

此手は後家けいせい其外三十より上の女に用ひてよし。そのわけすいならぬ。わかきむすめなどの玉門せばきにいむべしとぞ」（七ウ）

八丁落丁

指添の曲

是はつねの本手也子をうみたるあとまたひろき玉門にもちひてよし先一儀をくわだつる時つねのことくおしこみて男の右の人さしゆひが又はゆびかたにてもつばきにてなるほどぬらし玉くきの上のかたにのせ女のしらぬやうに一所におしこみ出入さすればゆびのはらにて玉門の上のかたをこするゆへいかほどたしなみある女もゐん水こと〳〵くもらしてその男をわするゝことなし

評云

はじめよりゆびをいるゝは悪し先つねの物にてやりくりうるほひ出てからゆびそへてよしゆひのはらを上へしてつかふべしゆびがたはくるしからず」（九オ）

乱の横抱

此手はおとこも女もよこにふし女のふとも丶の内へ入ねながらおこなふ女のかたあしをおとこの手にてあければよくはいりて又玉門へ出入のわけ見ゆること一けいなりかくおこなへはおとこのかたにたもつこと久し女のかたにもいはれぬよろこびうへなきこと也冬もちひてあた丶かなりしたしなひ男などは入づめにしてすぐにねいる人ありめつらしき女なとにはさもあるべきかすきの女はゐんせいながれ出てふとも丶よりふとも丶まてつとふ御用心

評に云

夏ははだを合するゆへ汗ににほひありて□□用捨あるべき」（九ウ）

添肌

是はきよくなり惣じてきよくは千反万化。其人〳〵のはつめいしだひ。少のかはりめにてやりくりもめづらし此手は女をふさしめ。本手にして玉くきをなかば入さて。女のあしをそろへのばさせておこなふ。しやくむしにてつかへある女は玉ぐきふかういるをいやかる物也。ふかくいるれば。女のかたしやくのむしをこる。かく物すればふとも丶に玉くきはさまれてふかく入ず。女のよきやうじやうなり又ながき物持たるおとこにあふ時かくのごとくすればふかくいらずと心へ給ふき事なりかし」（十オ）

女立見

是またきよくのひとつ也めつらしければこ丶にづを出してしよしんのために見せ侍る物ならし

かゞみにうつりて其おかしさいはれずとぞ」（十ウ）

惣まくり

これ又きよくのひとつなり此手にてはみじかき物持たるおとこふかういれんとおもふ時かあるひはすきな女ありてそのおくのかたとのぞむときかくしぐみて物すれば玉

ぐき玉門のおくの間までとをりて女たんのふすることうたがひなし」（十一オ）

是迄八ケの秘伝なり。此日用食性を見おほへ。其ほど〳〵にやりくりし。多からずすくなからず。養性のつねを守なは。男は虚労の病なく女は血の道の患をしらず。子孫さかへ家めてたかるべし。穴賢

すまの浦右衛門

須磨の浦太郎殿へ参

京三條通油小路東江入町

西村市郎右衛門店

江戸神田新革屋町

西村半兵衛板行之」（十一ウ）